

放蕩息子(娘)を愛しつつ、サバイバルする

アンディ・美湖 (訳：美湖純子)

あなたの子供は、12歳で涙ながらにイエスキリストを心に迎え入れた。その後、学校では良い成績をとり、信仰を持って神に従うことを求めている。そして、サマーキャンプでフルタイムのクリスチャンワーカーとして献身を決心した。完璧？子育てはきれいなリボンをつけて完了した？そうとは限らない。人生は、引き続き旅路である。その道のりには、まだ多くの障害物、誘惑、落胆、決断の時がある。子供は、分かれ道でどの道をとるか、自分で決断しなければならない。しばしばその道は、まっすぐで狭い道からかけ離れた道である。親は、子供に正しい道を選ぶよう、できる限り励ますが、しばしば、心碎かれることもある。

どうしてか納得できない。あなたは、子供にいつもキスをし、転んだら起こし、夜のお話を読み、スポーツイベントには参加し、教会に連れて行き、宿題を手伝い、病気のときは看病し、服やプレゼント、おいしい食べ物を買ってあげた。自分ができる限り、物質的にも感情的にも霊的にも、すべてのものを与えてきた。でも、子供はそれを無駄にする。それが放蕩息子(娘)がすることだ。彼らは、すべてを無駄にする。可能性を無駄にし、能力を無駄にし、健康を無駄にし、将来を無駄にし、時にはいのちさえ無駄にする。あなたがあたえたすべてを。たまらないことだ。

そのとき、あなたは不思議に思う。子育てでは、正しいことを行なったら、正しい結果を期待できると本に書いてあったのではないか？専門家は、これやあれをしたら、終わりに報酬を得られると言っていたのではないか？聖書では、「若者をその道にふさわしく教育せよ。そうすれば、年老いてもそれから離れない。」(箴言22:6)と書いているのではないか。しかし、はっきり言って、それほど簡単なものではない。あなたは結果をコントロールできない。では、箴言22章は何をいっている？誤った解釈に気をつけなければならない。子供を正しく育てれば、正しい子になると約束している？そうではない。ちょっと説明を加えてみよう。箴言は、知恵の書の分野である。知恵の書は動かない事実ではなく、「傾向」つまり、一般的にどうなるか——ということを述べている。しかし反対になることもある。箴言は約束ではない！それを理解しないと、聖書をねじることになる。もし箴言22:6を、約束としてとりあつかうと、聖書の他の箇所とかみ合わなくなる。このような誤った解釈が、残念ながらよくみられる。説教台から語られることもある。

結局は、保障はない。あなたがどれほど完璧な親であろうと、どれほど素晴らしい環境を築こうと、子供は反対に行くかもしれない。エデンの園を考えてみよう。神は完璧な父で、すべて正しいことをされ、子供たちは文字通り、パラダイスにいた。しかし、その子供た

ちがこの地と全人類に罪ののろいを持ち込んだ。あなたは100点満点の親で、素晴らしい環境を築いたかもしれないが、子供たちは、将来を台無しにしてしまったかもしれない。しかし、多くの親は、結果をコントロールできるという奇妙な幻想のもとにいる。ここで自問しなければならない。私たちは、神よりよい仕事ができるだろうか？もし、神の子供が反抗したのなら、私たちの子供がそうならないとどうしていえるだろう？神に逆らったのは、エデンの園ではなかった。聖書には、神の子どもイスラエルの反抗に対する神の嘆きがぎっしり詰まっている。エジプトではどうだった？大いなる災害、分かれた紅海、地球上最強の軍隊の壊滅に示された、“誰が神か”という力強いレッスンのすぐ後で、神の子どもたちは記憶を焼き去り、金の子牛を作った！それはとどまらない。世代を超え幾世代も、神の民は、神から迷い出た。(イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、わたしの子をエジプトから呼び出した。それなのに、彼らと呼ばば呼ぶほど、彼らはいよいよ遠ざかった。ホセア11:1-2)

完全な父に対する反抗は、士師記、預言書、旧約聖書全体を通して続いている。そして、新約聖書にもあらわれる。イエスは、良き教師であったはず。しかもわりと良い師匠だったはず。(実際世が知る限り、最高で完璧な師であった。)しかし、イエスには、あのイスカリオテ・ユダという名の弟子がいて、まさにイエスを裏切り売ったのである。このように、反抗的な子どもは神にとってよくあることであった。そうであれば、わたしたちの子どもが反抗的であることも、良き親、しっかりしたクリスチャンであることと関係なく起こるのである。もし放蕩息子(娘)をもっているなら、それが、確かに意味するのはただひとつ、私たちは主と同じ経験をしているのである。

そうはいつでも、やはり、簡単なことではない。放蕩息子(娘)をもつことは、言葉に表わせない苦悶である。夜中に眠れず、日中は自失呆然。たとえ罪責感を持たなくても、痛烈な2つの痛みに遭遇する。まず、非難される。社会はかなり容赦ない。そして教会にも、厳格で批判的な人々、たとえば箴言22:6を振りかざし、目を見張る人がいる。そういう人々は、こうコメントする。「もしあなたが子どもを本当に愛していたら、もしあなたが神にしっかり従っていたら、もし確かな知恵があったら、状況は全く違っていただいでしょう」と。彼らは、あなたを諭そうと、自分の子どもの「できすぎ君」又は、「ホームスクール天使」を指し示す、プライド高いタイプの親かもしれない。子育ての成功はすべて恵みのゆえという事実をまったく忘れてしまって。驚くことに、ある批判的なタイプの人、子どもを持ったこともないのに批判する。それで、あなたがなんとか罪責感から抜け出したとしても、批判されることを免れないかもしれない。これには非常に落胆させられる。とくに、もう一つの痛み：悲嘆が常にあるのだから。

放蕩息子(娘)に対する悲嘆により、親は生身を剥がされ、命さえ奪われる危険がある。悲嘆はすべてを憔悴する。子どもを失うことは、文字通り自分自身の一部、とても大切な部分

を失うことである。悲嘆は骨の奥にまでしみ込んでいくように感じる。多くの親はここから立ち直ることができない。しかし、悲嘆は意図された目的地がある旅路である。確かに衝撃、否定、怒り、死の感覚がある。しかし、そこで、より深いレベルで、より深遠な方法で神との遭遇に到達しなければならない。もちろん、良い子どもは神に栄光を帰す。しかし、放蕩息子(娘)をもつ、信仰心の厚い親は、全く違う水準で神に栄光を帰す。放蕩息子(娘)の親の肯定的な面は、彼らはより謙遜で、より憐れみと恵み深く、神にたいする自分の必要にもっと敏感である。その点ではより実質的——真にかけがえのない資質である。

では、放蕩息子(娘)の親はどのようにそこに到達できるだろう？私自身まだその過程にいるが、3つのことをお分かちしたい。まず1つは、私たちは手放さなければならない。悲嘆し、そこから進まなければならない。子どもが神から逃げているとき、私たちは、どうすべきだったのか、また、今何ができるか必死で考え、自分を苦しめる傾向がある。ほとんどの場合、私たちがすべきことは、自分には全くコントロールできないことを認めることだ。自由意志は、自由意志で、それは彼らによるもので彼らだけのものである。もし、手放すことができないなら、平安を見出すことができない。私たちが神のみ手に状況をゆだねるとき、不思議な解放がある。子どもたちは、親が立っているところ、そして、その扉は悔い改めた心にいつも開かれているが、親はこれ以上巻き込まれないことを知る必要がある。これは、聖書的である。私たちが罪を犯すとき、天の父は隔たりをゆるされる。神は私たちが踏みつける玄関マットのような存在となることを拒まれる。

2つめは、祈ること。もちろん、もうすでにしていると思う。でも、もう何度もだめかと思っても、あきらめないで。祈りは、時には意味がないように思えるかもしれないが、そういう時こそ、信仰の祈りが有効である。祈りにおいて、物事は動かされ、目に見えよう見えまいと、それは聖書の確かな約束である。少なくとも、祈りは私たちを変えるのだ。

祈りは様々な形態をとる。あなたは、断食と献身的な祈りで集中的とりなしをする人かもしれない。また別の人は、感情的枯渇があまりに激しく、そんな祈りはできないかもしれない。あなたのできることはただ、空っぽの手を神に差し出し、「おお主よ、あの子はあなたのものです。御心がなされますように。」ということだけかもしれない。祈りは、かならずしも多くの言葉は必要ない。私は、どの祈りであろうと等しく受け入れられると信じている。祈り続けていこう。

3つめは、喜びを見つけること。すでに述べたように、あなたは険しい道を旅してきた；罪責感、批判、そして悲嘆という盗賊に襲われた。あなたの喜び指数は、スケールで一番低いかもしれない。かなり多くの人々がそこにあまりに長くどまり、抜け出せなくなっている。人生を喜び、神が与えてくださっているものをたたえる方法を見出そう。喜びにつながる場所へ行き、喜びにつながることをなし、喜びにつながることを言おう。つい

にあなたは、あなたの話に真剣に耳を傾けてくれる安全な人を見つけ、悩みを打ち明けられる小さな喜びをみいだすだろう。そして、このストーリーの幕はまだ引いていないという考えを常にもち続けよう。私の兄は、私が知る放蕩息子の一人である。素晴らしいクリスチャンホームで育てられたが、彼は反抗、麻薬、アルコール中毒、刑務所の道を選んだ。私の両親は、苦悶し祈った。両親2人とも世を去ったが、2人とも兄のために、死ぬまで祈り続けた。数年前、兄は脳溢血になった。片目が失明し、将来も全く使い物にならないので、医者は取り除こうと言った。兄はいやし集会に参加した。彼の目は焼かれ、洗い流された。そして、奇跡が起こった。見えるようになったのだ！それだけではなく、神は、手に負えないアルコール中毒を同時にいやされた。彼は、人生の最後の数年、いつもイエスのことを語り、神を褒め称えた。両親はこのことを見ることはなかったが、、、。

神は私たちすべてに召命を与えられる。私たちすべてが、選択権を持っている。誰も他の人のために選択できない。あなたの家族は、召命に心を留め、従順にニネバへ向かって行ったかもしれない。しかし、家族の一人が、神の放蕩息子ヨナのように、反対の方向、タルシシュへ向けて船出することを選んだかもしれない。おそらく彼は神の臨在から離れていったが、実際嵐に向かっていった。彼らは反抗の船の底にいるかもしれないし、すでに海に投げ出されてしまったか、もしくはどろどろべたべたした魚の腹にいるかもしれない。今は、彼らと神との問題である。彼らは、神を神として認めるだろうか。あなたには分からない。あなた的手中にはないこと。あなたに与えられた任務は、明白で簡単——召命に従う——ニネバで神に喜んで仕えることだ。

最後に、ビリーグラハムの妻であり、放蕩息子の母であるルツ・グラハムの祈りの詩でとじよう。

,,, 彼らに、寒さと病を；
彼らに恐怖を知らしめたまえ；
彼らをアザミ、雑草、とげで養いたまえ；
狼を友と撰んだ者に、
無力な迷えるものに狼がなすわざを味わせたまえ；
しかし、おお！彼らを生きながらえさせたまえ——砕かれ、より賢く
どこであろうと、どれほど遠くさ迷いあるこうと、
共にいて、見守り、支えたまえ
愚かで、強情で、頑固な、あなたの羊を
そして、いつの日か、彼らを家に導きたまえ

(アーメン、アーメン)